

彙報

一 京都哲学学会公開講演会記事

恒例の京都哲学学会公開講演会は、平成十年十一月三日午後一時半から、京都大学文学部新館第三講義室において左記のごとく行われた。

一、キリスト教信仰と宗教言語

京都大学助教授 芦名定道氏

一、ヘーゲル研究の現段階

京都大学教授 加藤尚武氏

講演会は数多くの会員の方々の出席を得て盛会であった。また講演会終了後、京大会館において懇親会をもち、多数の会員が講演者とともに討論と欲談の一時を過ごした。

二 外国人学者来訪講演会記事

平成十年七月より平成十年十二月末までに、京都大学大学院文学研究科の旧哲学系諸研究室の主催ないし共催のもとに行われた、外国人学者による講演会は、次の通りである。

ヨハネス・ラウベ氏 (ドイツ・ミュンヘン大学教授)

「ヘーゲル、西田、田辺——その国家哲学の比較、とくにヘゲモニーの問題の取り扱いをめぐって」

平成十年十月六日於京都大学文学部

イェルク・ヤンツェン氏 (ドイツ・ミュンヘン大学教授)
「シェリングの体系構想」

平成十年十一月二十四日 於京都大学文学部

三 京都大学文学部 (哲学系) 卒業論文題目

——平成十年三月——

哲 学

佐藤 千洋 デリダ『声と現象』について

日 高 順 フッサール『現象学の理念』の考察

飯 束 順 二 ベルクソンにおける「意識に直接与えられているもの」について

高 橋 徳 弥 『論理哲学論考』についての一考察

三 宅 岳 史 ベルクソン哲学における「言語」と「運動」について

吉 川 啓 一 郎 自由についての存在論的「了解」に関する一

考察——実存としての J. P. Sartre——

中 島 裕 介 カントの純粹理性批判における主体の問題

青 木 滋 之 ロックにおける生得観念の否定と自然法——

『自然法論』を中心に——

石 田 真 衣 子 デカルトにおける意志の自由についての考察

——真理の観想と実生活での使用——

西洋哲学史

成瀬 雅也 カント『純粹理性批判』における演繹の方法論について

論について

吉川 大介 トマス・アクィナスにおける自然法について

守谷 哲毅 『神学大全』第二部の二を中心に——ハイデッガーにおける「歴史性」と「死への存在」——『存在と時間』に至る思想の形成過程を通じて——

過程を通じて——

インド哲学史

藤川 雅男 古代インドの唯物論について

中国哲学史

石川 雄一 王弼についての一考察

倫理学

岡本 一太 メノンにおける徳の定義と想起説について

林 芳紀 ロールズの「基本財の平等」について

藤田 智子 『方法序説』においてデカルトが「確実な認識」に至る過程

藤島 信明 生命操作技術と人間性

美学美術史学

梅田 智彦 クリムトにおけるジャポニスムと装飾——晩年（一九一〇年代）の作品について——

屋外彫刻と景観の問題

河村 直子 フェリーニ「8½」におけるメタシネマの構造

小山 龍介 芥川龍之介『地獄変』にみる地獄絵について

崎川 牧子 カルロ・クリヴェッリについて

佐藤 由貴 渡岸寺十一面観音像について

皿井 舞 スティーブ・ライヒのミニマル・ミュージックについて

中川 克志 William Morris のテキスタイルをめぐる考察

橋村 志保

松岡 久美子 清涼寺式釈迦如来についての一考察

山本 寛 「もののけ姫」に代表される一九九〇年代アニメーション作品と現代日本文化の心性との相関性

伊藤 敦子 長沢芦雪筆無量寺襖絵に関する考察

伊藤 敦子

相関性

長沢芦雪筆無量寺襖絵に関する考察

伊藤 敦子

宗教学

池山 環 メルロ・ポンティにおける「世界内存在」としての身体について

梅原 麗 『教行信証』における「三願転入」の問題

永合 孝全 ハイデッガーの『存在と時間』における超越について

について

仏教学

青山真樹 戒律の解釈と実行の問題について

江田昭道 『宝行王正論』における諸問題

志賀浄邦 中観派による三世実有説批判——特に、Tā-tvasaṅgraha ṅ Prasannapadā に見られる

時間に関する章の比較において——

津田明雅 Catuṣṭaya における空の思想

心理学

荒田寛直 異性に対する対人魅力において身体的魅力の占める比重——その男女差——

石田開 単語の反復提示が文再認に及ぼす効果

大西武史 社会的行動に及ぼす集団の影響

川口綾子 刺激の知覚的要素が直接ブライミングに及ぼす影響

菊川亜紀 単語により喚起される感情が記憶に及ぼす影響

笹岡貴史 三次元物体の脳内表現および比較過程

杉浦ゆき 向社会的判断の手がかりとなる要因

那須一真 視覚情報処理過程における時間的拘束条件

二階堂香 デンショバトのカテゴリ弁別学習におけるプロトタイプ効果

堀田秀治 色彩の好悪判断と色彩イメージの関係

松浪竜一 知的レベルと創造力の関係

溝渕美保 独自性欲求の類型と独自性追求行動の関係

岡野由紀子 被援助者の否定的反応をもたらす要因

永森光康 独自性欲求と自己意識の関係

社会学

香月友愛 『優勝』に見る日本競馬文化の変遷

米山達也 ルーマンの社会システム論に関する考察

糸井佳奈子 高齢者を支える地域活動に関する社会学的考察

井上真知子 死の準備教育

片島有紀 災害流言に関する社会学的考察

蒲田麻里 性格分類の擬似科学

小籾康博 現代におけるメディアとコミュニケーションに関する社会学的考察

阪本博志 メディアにおける「若者」論の歴史社会学的考察

砂田明子 漱石の知識社会学的考察

十河朋子 女性の自立とセクシャリティに関する考察

高橋英里 明治期京都における部落差別の生成について

竹内笑子 日本型学歴社会の社会学的考察

竹志道雄 現代若者文化とラクロス

平川靖之 ストレス社会の考察

福田靖久 ポストモダン都市

前多千絵 怪談の社会学的考察

水野隆 社会的関心の構成過程

山村哲史 中山間地域振興に関する社会学的考察

吉田健一郎 「差別語」に関する社会学的考察

渡邊拓也 逸脱に関する一考察

大熊正浩 アダルトチルドレンの社会学的考察

小平久仁雄 ニューカマーの定住化と「共生」の可能性

右田裕規 「生きがい」を巡る言説についての社会学的考察

科学哲学科学史

科学哲学科学史

澤井直 ハーヴィーの動物発生論についての考察

四 京都大学大学院文学研究科（哲学系）

修士課程修了論文題目

——平成十年三月——

哲学

中野安章 バークリーにおける奥行知覚と視覚言語説

西村正秀 ジョン・ロックによる性質の理論について

吉田寛 前期ウィトゲンシュタインの「像の理論」

吉永周平 デカルトの人間論

LEONARDI ANDREA 純粹経験の形而上学——西田幾多郎

の自己考察を手がかりとして——

追分晶子 トマス・リードにおける常識の擁護

西洋哲学史

大月栄子 偽ディオニュシオスの『神名論』第四章における「善」について

関沢和泉 前期様態論学派の言語把握——主にダキアのポエティウスに即して——

村上正治 プラトン『クリトン』におけるロゴスの構造

インド哲学史

インド哲学史

永田啓介 Rajatarangini（一章から三章）に見られる Nīlāmata の影響

中国哲学史

中国哲学史

山花哉夫 『論衡』における矛盾の諸相

日本哲学史

水野友晴 自覚の立場と絶対意志の立場

倫理学

斎藤一真 カントの国家論の法的原理——三権分立と抵抗権の問題を中心として

鈴木真 ジョン・ステュアート・ミルにおける諸個人の発展の概念と自由原理

の発展の概念と自由原理

中谷 常二 ストックホルダー理論とステークホルダー理

論

吉村 幸彦 荻生徂徠の制度論について

美学美術史学

碓井 みちこ シラーとドイツ・ロマン主義（主にフリード

リヒルシュレーゲル）との関係について

高田 充清 エレファンタ石窟彫刻の研究

生田 ゆき フランス王立絵画・彫刻アカデミー素描―色

彩論争における情念表現について

市川 彰 伊藤若冲筆鹿苑寺大書院障壁画試論

高松 麻里 展示される「歴史」——一八九三年シカゴ万

博鳳凰殿にみる日本美術の演出——

宗 教 学

後藤 正英 カントの道徳宗教について——自然的幸福か

ら道徳的幸福への質的展開について——

土佐 明 ヤスパースにおける実存と自由

仏 教 学

赤羽 律 ジュニャーナガルバの「二諦分別論」におけ

る二諦説

村尾 耕一 瑜伽行（唯識）の研究

キリスト教 学

嶋村 美智子 ベルナルルの『雅歌講解』における神秘主義

の研究

大石 祐一 「エレミヤの告白」における預言者の思想と

信仰

心 理 学

粟津 俊二 ラットにおいて社会的関係が社会的相互作用

による食嗜好の形成に与える影響

十河 宏行 眼球運動時における空間定位機構の時空間特

性

内藤 智之 視覚的注意の上下視野間における非対称性

——偏心度に伴う視覚誘発電位の変化の検討

三崎 将也 カテゴリー分け学習による認識空間の変容

松本 淳子 音楽の選択的聴取と感情の関係

社 会 学

阿部 利洋 「語り・身体・癒し」の社会学的考察

石田 あゆり 昭和前期のエコロジー的社会観——その歴史

社会学的考察

井戸 聡 中山間地域における環境認識の社会学的研究

高木 学 過疎地への移住者と地域活性化に関する社会

学的考察

松浦雄介 社会学的理性の変容

宮武実知子 ハンス・フライヤーの共同体論

村上浩介 コミュニケーションの多元性

坂部晶子 植民地の記憶の社会学

科学哲学科学史

野澤 聡 ヨハン・ベルヌーイにおける力学の原理の探求——自然学としての力学——

五 博士後期課程学修者氏名(哲学系)

——平成十年三月——

哲学……久米暁、関水克亮

西洋哲学史……菊池建至、高田佳代子、松根伸治、次田憲和

中国哲学史……李惠京

倫理学……奥野満里子

美学美術史学……青山勝

宗教学……小野真、重松健人

仏教学……山中行雄、金仕業

キリスト教学……今井尚生

心理学……朝倉暢彦、安藤新樹、仁科繁明

社会学……田野大輔、筒井清輝、野崎賢也

前 号 目 次

理性とは：：分別か：：……………荒牧典俊

道徳起源論から進化倫理学へ……………内井惣七

計算の哲学的意味……………齊藤了文

近代の存在論……………山脇雅夫
——ヘーゲルの現実性概念——

次号論文予告

神の像と人間……………水垣 渉
——キリスト教人間論の一つの問題点——

ヘーゲル「自然哲学」の改訂過程……………加藤尚武

キリスト教信仰と宗教言語……………芦名定道

スピノザと主観性の消失……………松田克進